

それでも結婚したい 症候群

「恋愛塾」に通う 女たち

風樹茂 ジャーナリスト

恋愛も格差化が進みつつある昨今。
女性に恋愛術を指南する教室があるという。
いったい何が教えられているのか。



最近結婚難、かつ恋愛難のせいとか、官民を問わず男女の出会いのための仕組みが雨後の竹の子のように誕生している。出会いパーティ、結婚相談所、出会い系ネットサイト。

それにもかかわらず、少子化は止まらないし、周囲を見渡しても、20代、30代の恋人のいない男女が多い。彼ら、彼女らは「いい男がいな」「いい女がいな」「出会い機会がな」とよく口にする。そんな中、90年代後半には「ナンパ塾」「口説き塾」など、もてない男

に恋愛技術を教える塾が出現した。ところが今は女さえ恋愛術を磨こうとお金を支払って「恋愛塾」や「恋愛セラピー」に通っている。いったい、今の男女関係はどうなっているのか？ 実態をさぐった。

テキストは文学書

6月中旬の土曜の屋下がり、「恋愛塾(男女共通講座)」(<http://renai.jp>)の会場となる東京神田のビルの前で取材ノートを作っていると、女性3人がこのビルを目指すかのように歩いてくる。10代

である。後に判明したのだが、3人は私大に通う大学生で、後の1人は帰国子女の大学生ということだった。

男性の参加者も6人で、年齢は20代、30代後半。それぞれに失礼だが女性参加者と違い、モチナイオーラを放っている。職業はIT企業の社長、塾の講師、公務員、パチンコ店員、フリーター、学生1名、中には鳥取や岐阜からわざわざ来ているものもある。

さて、塾長の草加大介がネクタイ背広姿で現れた。草加は20代前半までは役者志望のもてない男だった。だが、渋谷の路上でエステサロンのキャッチセールスを経験したこと、何度断られても女性に声をかける勇氣と女性へのアプローチのコツを掴み、さらに友人のもてる男から口説きの秘訣の一端を学んだという。その後、300人の女をものこにして、その経験をもとに世のもてない男たちを救うべく「ナンパ塾」を開設したのが1998年。この手の塾の嚆矢である。ナンパ塾は路上ナンパの実技まであり、成功率は高い。今回出席の男性の半

数はその塾の卒業生。今度は結婚を前提としたよりまじめな恋愛へと移行したいのだという。「恋愛塾」のほうは座学であり(4日間のレッスンで1日5時間、13:00〜18:00、1レッスン女性21000円より、男性は別途入会金要)、実技はない。今年3月から開校し、塾生から恋人ができたという報告がいくつか来ているという。

さて、草加はその日のテキストを配る。4日分は40頁にわたる。内容を見て、ちょっと驚く。三島由紀夫、スタンダール、芥川龍之介、福田和也、吉行淳之介、ウ・ロシニフコー(フランスの貴族)など文学者たちの恋愛に関する考察がずらりと列挙されている。

草加は開口一番、「日本の戦後はアメリカ的、西欧的恋愛を強いられる結果となったけど、それが日本人にあうかという疑問、たとえばスタンダールは見合いを嫌悪して最低だといっている。でも本当にそうなのか？ 彼らが描いたのはたとえ貴族の恋愛だし、国柄も違う」「テレビやドラマのような恋愛は決して

後半から20代前半だろう。今風のファッションに包まれた体は梅雨の台間の強い陽射しを浴びて、この年齢の女性だけが持つ神々しいまでの光を照り返している。みな、きれいな、かわいい。まさか、こんな娘たちが恋愛塾に参加するのだろうか？

彼女たちはべちゃくちゃと談笑しながらビルに入り、エレベーターに乗った。あわててあとを追ったが、無情にもエレベーターのドアは閉まった。

3階の会場に行くと、彼女ら3人は後ろの席に座っていた。やはり疑問である。なぜ、こんな若くてかわいい娘たちがわざわざ恋愛塾に参加するのか？

私は、付き合ってきた男に満足できない症候群の20代後半、30代の女性、あるいは、その年代の負け犬になる不安を抱えた女性たちが、よりよい男を得る技術を習得するためにこの塾に参加するとはかり考えていた。ところが、部屋を見渡すと、30代前半らしき女性は2名で、前述の娘3人組と、もう1人のちよつとすました感じの美人も見ると、20代前半

ありえない。「世界の中心で、愛をさけぶ」みたいなドラマの主人公にはなれない。それに、テレビで恋愛を語っている女優やタレントは結婚をしていないか、離婚経験者。つまり、基本的にもてない女性である。それがあなたたちもてない女性に教えるというのとは、とんでもない」

女性のシンデレラ願望を打ち破り、マスコミが作り出した恋愛教祖を否定し、過去の価値への回帰を説く。テキストの最初是三島の『葉隠入門』(新潮文庫)の技粋なのだ。その技粋の一部を紹介してみる――。

「アメリカふうな恋愛技術では、恋は打ち明け、要求し、獲得するものである。恋愛のエネルギーはけっして内にたわめられることがなく、外へ外へと向かって発散する。しかし、恋愛のポルテージは、発散したとたんに減殺されるといふ逆説的な構造をもっている。――中略――もし、心の中に生まれた恋愛が一直線に進み、獲得され、その瞬間に死ぬという経過を何度もくり返していると、現代独特の恋愛不感症と情熱の死が起こることは

目に見えている」

夢のような恋愛を否定するには、「愛の思想史」(伊藤勝彦・講談社学術文庫)が用意されている。「もしも愛がスクリーン上の絵空事でなく、自分たちのあいだの真剣な問題であると気づいたら、否応なしに、愛の不在という事実が直面せざるをえない」

芥川龍之介「侏儒の言葉」(新潮文庫)もある。「恋は死よりも強し」と云うのはモオバスサンの小説にもある言葉である。が、死よりも強いものは勿論天下に恋ばかりではない。たとえばチブスの患者などのビスケットを一つ食った為に知れ切った往生を遂げたりするのは食慾も死よりは強い証拠である」

草加の思想、それを裏打ちするテクニスト、300人の女性とつきあったと豪語する草加の経験談が差し挟まれる。

「女性の君らがやり逃げされたくないのはよくわかってるんだよ。それが一番いやだったのを。クラブにまるでその常連のような仕事で来る女がいたけど、フロアスタッフなんかとも親しげに話して、優しい、浮気しない、経済力がある、というのが恋人の条件らしいけど。」「誰もがそう言うんです。でもひどく背伸びすることはありません。ナンパした男についていったら、殺されちゃったとか、ばらばらにされちゃったとか、そんな事件を見聞きして生きている世代ですから。根本にあるのは、みじめなことをやりたくない、周囲にバカにされたくない、かっこわるい恋愛したくない、どうしようもない男と付き合いたくないってことです」

——現代の経済格差の影響は。

「若い世代の女性は、ニート、フリーター、派遣社員との恋愛をどう避けるかなんですよ。大卒でも正社員になれない人間が周りにたくさんいるわけですから。具体的には、「優秀な大学の学生と出会ったほうがいい、レベルの低い大学の学生と接点を持たないほうがいい」と指導

て、なぜ彼女がそんなふうにしていったか、まったくわからない。男はそんな女性を見てどう思うか。それに対して、食事のときにきちんとハンカチを膝に置くような女性、あるいは豪華なレストランに連れていって、これは韓国人だったけど、「こんなすごいお店でなくていいんです。別のお店で」っていったりする女性には、やり逃げなんてできない。男は最初は外観にひかれるけど、次には仕事、そして性格をきちんと見ているんだよ」

草加に声をかけられたのは、30代半ばとおぼしきIT企業の社長である。その後、人生における恋愛の比重の男女の違い、他者と比較することの無益、男女の恋愛心理、恋愛の手管の基本が語られ、テクニストには「ラ・ロシュフコー箴言集」(二宮フサ訳・岩波文庫)、「恋愛論」(吉行淳之介・角川文庫)、そして塾長自らの著作「口説きの鉄則」(幻冬舎)の抜粋などが用意されている。

とりわけ男性に対しては、自己愛を捨てるように助言する。自意識といってもいい。傷つくことを怖れてはいけないというわけだ。「この塾にくる男子は、1・8リットルのペットボトルを持ってくる奴が多い。そんなのはほかでは見ない。変だなんて思っていたけど、何が入っているかというとき、水だよ。つまり金をかけたくな。自分の何かを失うのがいやなんだ。たとえば、君は唯一、前の塾でナンパうまくいかなかったよな。それは自己愛が強すぎるからだよ」

さて、講義が終わってから草加に聞いた。「なぜ、大学生が参加しているんだろか。」「若い彼女たちは、30代の女性たちの失敗を見ているから、社会に進出して結婚していかないような女にはなりたくない、あんなっちゃ大変だって思っているんですよ。たとえ今の30代は芸能人と

しますよ。女性には相手を見極める目と相手から愛情を引出す方法を教えるんです。彼女らは就職先を探すのと同じように恋愛相手をさがしているんです」

なぜ、大学生が恋愛塾に?

「まわりにコミュニケーションをとれない子が多いんです。自分がわからない人ですね。ネットでも自分はすばらしい、誰それのようだ、ってナルシズムに浸っている人がよくいるけど、あれ、自分で自分がわからないんです。そんな人はいやですね。あとは自分の考えがなくて決められない人、たとえば食事に行くにしても、おれなんでもいって言ってりードしてくれないとか」

恋愛塾の講義中に、私は2、3の参加女性と話したが、はきはきと答えてくれたのが3人組のうちの1人、大学2年生

とつきあっちゃると、つぎの人ってなかなか踏み出せないと思うんですよ」

聞くと、彼女は4年ほどつきあっていた彼氏と少し前に別れたばかりだという。

「それに20歳の人が誰かにアタックするのと30歳の人がアタックするのってぜんぜんエネルギーが違うじゃないですか。年齢を重ねると仕事もできるし、自尊心ももっと強いし、振られたときのダメージって大きいじゃないですか。それで結婚も恋愛も遠ざかってしまうじゃないですか。だから早いうちにきちんと恋愛したくてこの塾に来たっていうのがあるんです」

恋愛格差はどうして生じたのか

私は松永への取材で、最後に彼女がぼつりと呟いた、「まわりをみると、普通に結婚して子育てして、がほんとうの願望なんです」という一言が一番印象に残った。だが、今は普通が難しい時代である。

『負け犬の遠吠え』（酒井順子・講談社）

の松永博美（19歳、仮名）だった。彼女とは、後日喫茶店で会った。松永は、心理と福祉を学ぶ大学2年生で、将来は養護学校で働きたいのだという。

——草加先生の授業はどういうところがよいのかな？

「そうですね。たとえば、杉本彩、西川史子とか、けっこうセクシーキャラで、女の人が目標にしていますよね。でもこの人たちって今、結婚していないですよ。愛について、恋愛について喋っているのに。なんでこんな人たちが調子に乗っているのかな。タレントの恋愛教祖みたいな人には離婚している人も多いし、離婚していることを参考にしてください、なんておかしい。でも、やっぱり影響されちゃうところがあるんです。洗脳されちゃうんです。メディアに。それは違うって言うってくれる人がいないんです」

——浮気をしない、優しい、経済力があるというのが一般の条件だって聞いているけど。

「男も女も自尊心が強いですから。男はふられる自分が怖い、だから声をかけな

が出版されたのが、今から5年ほど前、松永はまだ14歳だった。酒井は書籍の冒頭部分で、ある女性と同じ日に2人の男性に誘われる場合を想定している。1人は今のところ貧乏で話題の貧困な若い男性で、居酒屋に誘い、もう1人は既婚で物議の年上の男性がフグ屋に誘う。そして、フグ屋に行くのは負け犬への道になると書いている。だが、今の時代は両方とも負け犬になる確率が高い。貧乏な人間はそのまま貧乏に留まる可能性大なのである。

出会いの場が増えたとはいいが、それは違うだろう。場が提供されても出会いが減っているに違いない。ニート、フリーター、派遣社員は恋愛市場から除外されてしまうのだから。これらの男性はしかたなく生身の女性の代替を求める。ネットの世界や漫画のキャラクターを恋人にして、我慢する。そしてオタク化していく。その世界ではすべてが自由であり、思い通りになる。ところが現実の世界は違う。生身の女は違う。一度、機会があつて断られると、いつそう閉じこも

い。女も浮気されたら自尊心が傷つきますから、誰だって浮気はされたくありません。優しいというのは、人から染み出してくるもので、具体的に言えないけど、優しくない人以外は優しく思っています。彼氏にするなら最初のふたつで、経済力はデイトするのにこまらないお金があればいい。でも、若いうちにできたら結婚したいんです。だから、フリーター、ニート、派遣社員はダメです」

——結婚を前提にする恋愛はもっと難しくなると思うけど。

「たしかにそうですね。でも、ちょっとまえの『負け犬の遠吠え』って、読んでなくてもテレビとかでやるじゃないですか、で、女性で反論する人もいて。負け犬じゃないみたい。でも、彼女たちの遠吠えはやっぱり遠吠えにしか聞こえなかったんです」

——でもなぜこんな若いうちから結婚したいって思うの。

「たとえば最初につきあった人がいいかげんな人だったら、次の人、次の人っていきますけど、若いときにすごいいい人

ってしまふ。

一方、20代後半から30代の正社員の男性は仕事が多忙である。昨年1年間、私は企業で働いてみたが、いつ恋愛するのだろうかと思うほど激務である。上の世代はリストラされ数が少なく、逆に派遣社員が多く、この世代に負担がのしかかっている。まれに女性と出会う機会があつても、その後まめにメールをうったり、電話をする暇やエネルギーは湧いてこない。しかも日本人は欧米人のように狩猟民族ではなく、獲物を追って逃して、また追ってというような恋愛には慣れていない。

こうして、恋愛の場に参加する男性が少なくなるので、若い女性にとっても恋愛の機会は少なく、競争も激しくなる。知人の大学の講師に聞いても、女性は早く結婚したいという願望が強いという。私の知るいくつかの企業でも目ざとい女性に早めに会社の中で男を捕まえて結婚している。今後、社会は早期結婚者と、30代、40代の単身者に両極化していくに違いない。